

文化財だより

第 31 号

平成31年 3月

発行 真鶴町教育委員会

特集 生誕450年記念 風外慧薫 真鶴と風外慧薫 その軌跡を辿る

江戸時代後期に書かれた『名家略伝』（めいかりやくでん）には、風外慧薫（ふうがいえくん）にまつわる不思議な絵が挿入されています。

これは、托鉢に出た風外が突然の雨に降られて、大きくて重たい根不河石（ねぶかわいし）今の根府川石のこと）を頭上にかざして、雨をしのぐための笠にした、というエピソードを絵にしたものです。

真鶴には

「雨こんこん降ってきた 天神堂の坊さんに蓑笠もっていこう」という歌が伝えられていて、真鶴

における風外研究の第一人者であった松本雲舟（赴）氏の説によると、この「天神堂の坊さん」とは風外を指しているとのこと。

この歌は、托鉢に出た風外が、重い根不河石を笠の代わりに差したのを真鶴の人々が見て、歌ったもので、風外に対する真鶴の人々の親愛の情が感じられます。

この天神堂は、真鶴の有力な名主であった五味家によって、寛永七年（一六三〇）に建てられたとされ、

この場所に風外は菅原道真の木像と天満宮石祠を彫り、その傍に寿塔を建立したといわれています。

また風外は、その五味家の庇護のもと、およそ二十年間にわたって真鶴に住み、人々に深く愛されました。

昨年は、そんな風外の生誕四五〇年となる記念の年でした。今回の文化財だよりでは、それを記念し、風外の特集を組むことになりました。

岩地区の瀧門寺、貴船神社との関係、さらに小田原から真鶴への風外の変遷、そして真鶴に伝わる風外の作品の考察を通じて、真鶴と風外の関わりについて見ていきたいと思います。



特集

生誕450年記念 風外慧薫
真鶴と風外慧薫とその軌跡を辿る

目次

瀧門寺と風外

文化財審議会委員 川口 仁齊

..... 2

貴船神社と風外

文化財審議会委員 平井 倫行

..... 3

小田原と風外 そして真鶴へ

小田原市郷土文化館学芸員 保坂 匠

..... 5

風外慧薫の書画

真鶴に伝わる作品から

真鶴町教育委員会 新井 人志

..... 6

文化財トピックス..... 7

平成三〇年度文化財

保護事業 8

▲根不河石の笠をかぶる風外像

『名家略伝』より

瀧門寺と風外

川口 仁齊（瀧門寺住職
町文化財審議会委員）

風外は旧真鶴村に居住し歴史のなかにその名を遺した僧です。

平成三〇年度は、風外生誕四五〇年にあたり、生誕地である群馬県安中市や居住した小田原市では風外の残した書画の内、地元で伝わる書画の展覧会が開催されました。また真鶴町では中川一政美術館において平成三十一年一月から三月まで「中川一政と禅―奇僧風外慧薫と真鶴」展が開催されました。そこには、瀧門寺より真鶴町重要文化財に指定されている風外の手跡十二幅が、出品されました。

風外の詳しい説明は、先人の研究者の方々による研究発表にお譲りして、ここでは十二幅全体の紹介とその一部の点について考えてみます。

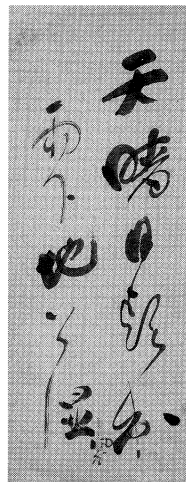
風外手跡十二幅は、草書で書かれています。だれもが読みやすくするため翻刻をしたいと思います。

- ①、棋局酔樵夫 ②、不善莫之違
回頭斧柯爛 忠言不至
- ③、学道之人 ④、路遙知馬力
不識真 歳久識人心

- ⑤、獅子不食鳴残 ⑥、為鼠常殘飯
快鷹不打臥鬼 憐蛾不照
- ⑦、雁思飛寒北 ⑧、人間自有
燕憶旧巢帰 長生薬
- ⑨、有水皆含月 ⑩、天晴日頭出
無山不带雲 雨下地上湿
- ⑪、薄々酒累千（鍾）↑「鍾」は欠字
不如濃酒一盃
- ⑫、莫怪頻過有酒家
多情長是惜年華



学道之人不識真
瀧門寺蔵

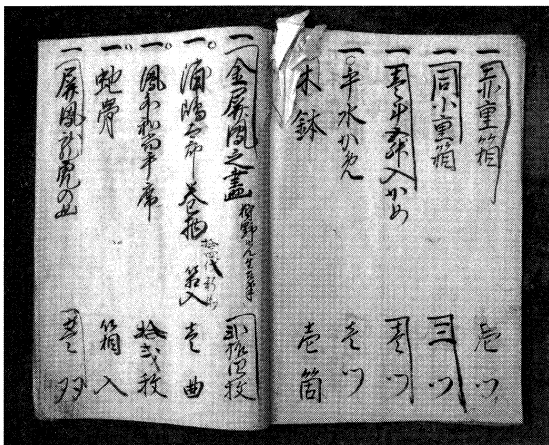


天晴日頭出雨下地上湿
瀧門寺蔵

これらの書は、寺の二十三世の代に奥の戸棚にグシャグシャになっていた状態の物を仮巻にまいて整理し保存してきました。寺の経済的事情があり、なかなか修復することもできませんでしたが、昭和六〇年頃、先の教育長であった故遠藤勢津夫氏が修復費用の一

部に当ててくださいと浄財を寄付されました。これを機に瀧門寺でも修復する費用を捻出し修復に踏み切り、現在のように軸装することができたのです。この風外の作品は、いつごろの作で、どのような経緯を経て瀧門寺にあるのか、その消息を伝える文章はいまだ見つかっていません。

修復のときにわかったことですが、いずれもふすまに使用する唐紙という和紙に書かれたものでありました。禅宗の寺では、本堂のふすまに禅語や仏教的な語句や絵画を大書してある姿をよくみかけます。風外も瀧門寺の本堂の唐紙に禅語や仏教語句を書いたのかもしれない。あるいは、瀧門寺以外の他の場所の唐紙に書かれたものを瀧門寺で保存していたのかもしれない。



瀧門寺校割帳 瀧門寺蔵

瀧門寺十五世吳峰越群（文化二年没）が編集した、真鶴町重要文化財に指定されている瀧門寺校割帳（財産目録）に風外手跡十二幅についての記述がありますので、そのとき前から寺に存在していたことが分ります。

瀧門寺の裏山には、大正一二年（一九二三）の大震災までは大きな瀧がありました。そのため大雨が降ると水害が生じて床まで水に浸かったことが何度あったと伝えられています。筆者も高校生ときには、普段は本堂の脇を流れる川は水が枯れてしまっていたましたが、ある日豪雨が降り、川が氾濫して下駄箱が浮きだしたのを記憶しています。水が豊富にながれていた時代には、川の氾濫はよくあることであつたようです。

風外の作品も床まで水に浸かる水害のときに、水に浸かったと思われ、シミが出たり、一部は破損欠字となつてしまいました。そのため欠けたところの字は何であるかはつきりとは判明しなかったのです。

その解決の糸口は、寺の生活や金銭の出納について書かれている真鶴町重要文化財に指定されている嘉永元年の「衣食住」に十二幅の内容がメモとして記載されており、それにより前出の十一番目の「薄々酒累千鍾」で□で囲ってある部分は欠損していましたが、「鍾」



龍門寺

（ぐい飲み）であることがわかります。この文言は出典も不明で、風外の自作なのかもしれません。さらに作品は、なかなか立派な草書で揮毫されていますので、楷書に置き換えることが難しかったのですが、このメモを参考にして楷書に変換することができました。

風外手跡十二幅だけを単独に見ないで、他の資料とともに有機的に見るといろいろなことが分ります。指定された文化財の重要な意義の一つもここにあります。

さる平成三〇年は、真鶴にもゆかりの深い風外（一五六八―一六五四年）の生誕四五〇周年にあたり、同人の故郷・群馬県にある「安中市学習の森ふるさと学習館」では、四月二十八日から七月十六日の期間、その活動を辿る「風外慧薫 ―安中で生まれた曹洞宗禅画の祖―」展が開催されていました。また、同年十月二十日から十一月二十五日には、小田原市郷土文化館分館・松永記念館において「生誕四五〇年記念 風外慧薫 ―洞窟暮らしの禅画僧―」展が催されるなど、ここにきて風外は、新たに多くの注目を集めています。

永禄十一年（一五六八）に生まれ、各地を放浪し数々の作品や逸話を残した僧・風外は、晩年、真鶴の地に長く逗留し、求める人々には時に応じ、書画を描き与えたと伝えられます。

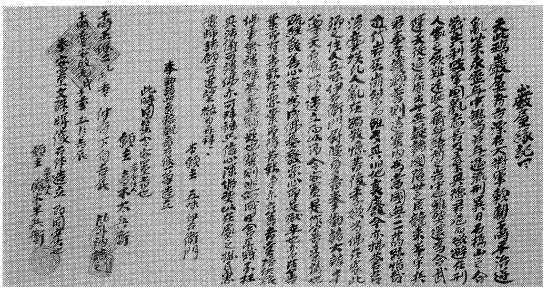
布袋や達磨図、寒山拾得といった禅画特有の画題を好んで描いた風外の飄逸かつ親しみやすい画風は、禅林美術の領域においてかねて高い評価を有し、経営学者・ピーター・ドラッカーほか、ギッター・イエレン夫妻など、国

貴船神社と風外

平井 倫行（貴船神社権禰宜
町文化財審議会委員）

外の美術収集家にも特に愛好されたものとして、『奇想の系譜』の著者辻惟雄はこれを、後に続く白隠、仙厓といった禅美術の流れへと継承される背景を醸成した存在と位置づけており、さらなる研究史上の展開が期待されるでしょう（『野に生きた僧―風外慧薫の生涯と作品』『市制六〇周年記念 相模の禅僧 風外慧薫作品展 平塚博物館所蔵・高瀬コレクション』平塚市美術館、一九九二年）。

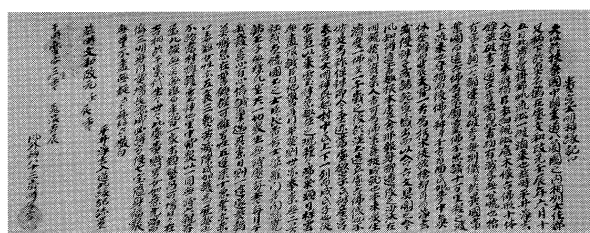
さて、当社に所蔵される資料『巖屋縁起』寛永二〇年（一六四五）および『貴宮大明神寄進奉加状』慶安三年（一六五〇）『貴宮大明神縁起』慶安三年（一六五〇）は、その全てがいわゆる絵画史料ではなく文字史料であり、これらはみな源頼朝や貴船神社創立に



巖屋縁起 貴船神社蔵

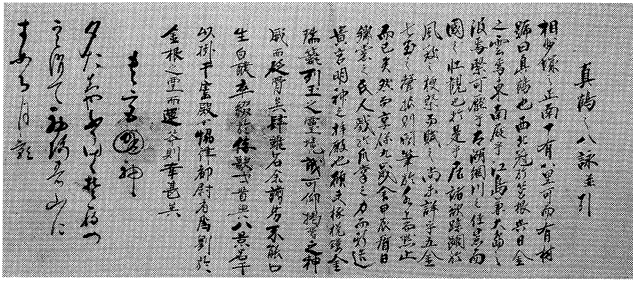
関わる記録という意味で、重要な史料的価値を有しています。わけでも『貴宮大明神縁起』は、風外の生年を特定する事を可能とした、現存、唯一の史料である点からも、実に意義深い文書であるといえるでしょう。

禅僧・風外と貴船神社との直接的な関係の実態を示す伝承や史料は、残念ながら存在しません。しかしながら名主・五味家の庇護のもと、当地の歴史や文化にまつわる多くの文書の作成に携わった風外の書記の背景には、すべからずこの五味家からの一定の意向が働いていたと推察され、当社との関係性もまた、こうした文化交流の内側において生じたものであった事が考えられます。

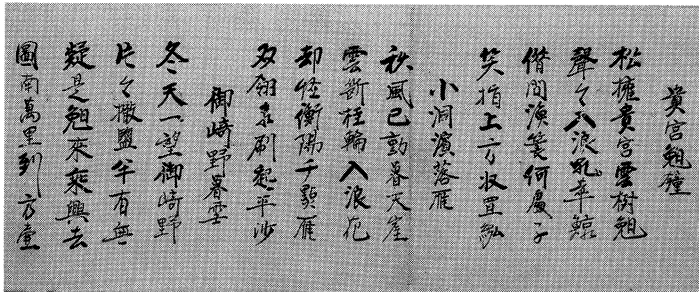


貴宮大明神縁起 貴船神社蔵

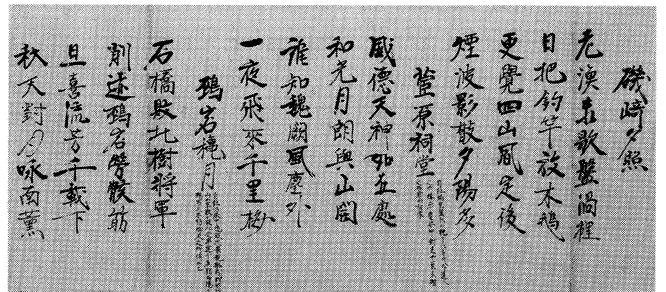
学識ある曹洞宗の僧・風外の手による、漢学や仏典の素養に基づいた格調高い詩文表現は、五味家にとり非常に重視されたものであったのではないでしようか。当社に伝わるもう一つの縁起『貴宮大明神降臨之記』観応三年（一三五二）に比しても、風外が記す『貴宮大明神縁起』の文体は、神社創建の由来を平井浄玄入道に仮託し、仏教的潤色を施した詩的印象の強いものであり、また同人が真鶴各所の景勝をうたつたとされる『真鶴八詠』〔享保九年（一七二四）、貴船神社蔵〕には、瀟湘八景からの影響を如実に感じさせる、風景表現に織り交ぜた心象描写などの、高い構成能力が認められます。



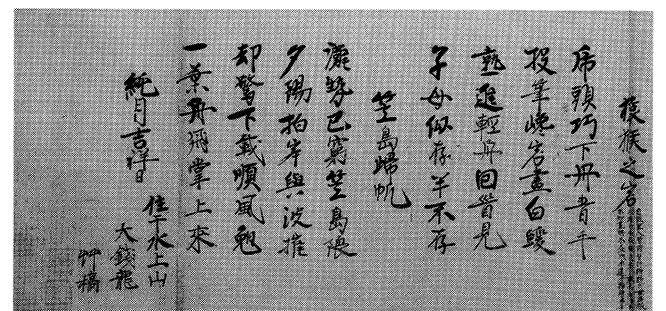
真鶴八詠(一部) 貴船神社蔵



真鶴八詠(一部) 貴船神社蔵

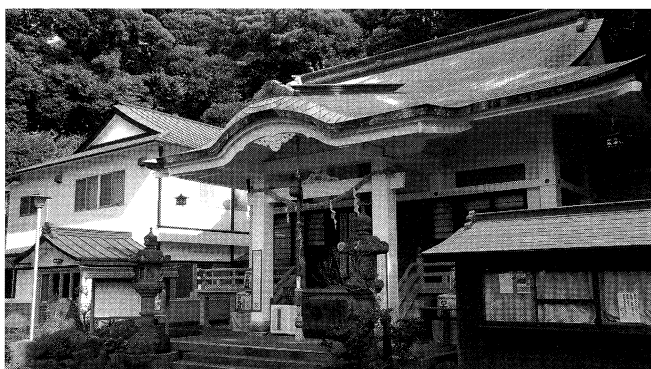


真鶴八詠(一部) 貴船神社蔵



真鶴八詠(一部) 貴船神社蔵

風外によるこれらの筆記は、前述のごとくいづれも往時の名主・五味家の関係圈において進められたもので、またこれらは特に、鴛窟に代表される同家主導の村内史跡整備の流れとも明瞭に関連した動きであった事が考察され、この後、同家所蔵資料の調査・研究が深められた際には、その周辺の事情や、あるいは当時の村落における風外、貴船神社の果たした役割に関する、新たな情報も得られるかもしれません。



貴船神社

的な歩みが志向されん事がのぞまれます。ともあれ、各地の風外関係企画を、まさに締めくくる形で開催された「中川一政と禅——奇僧 風外慧薫と真鶴」展が当地、真鶴町立中川一政美術館において一月四日から三月二十六日の期間、盛況のうちに幕を閉じられた事は望外な喜びであります。今回、曹洞宗禅文化の会の皆様、また小田原、安中、真鶴に住む郷土史家が、この風外をめぐる一連の動向を契機として相互の土地を幾度も行き来し、交流を重ねるなど、親密なネットワークが構築されたのも大きな収穫であり、今後さらなる、また継続した関係性から、新たな文化活動への発展がとり結ばれます事を、心より願うものです。

小田原と風外、そして真鶴へ

保坂 匠（小田原市

郷土文化館学芸員）

風外が小田原に滞在した期間やその間の活動については、記録が遺されておらず明確にはわかっていません。そのため風外が描いた禅画や地域に残る伝承、書籍などから推察する必要があります。

『日本洞上聯燈録』（以下、『聯燈録』）には、民衆に請われて相州成願寺に数年留まり、その後曾我山の巖窟に住むが、来客が多く南の真鶴山へ移ったとされています。

当時、上州にいた風外が、関東の端にある成田の民衆に知られていたとは考え難い。風外と小田原を結ぶキーポイントは、南足柄市にある曹洞宗の大寺院、最乗寺と筆者は考えています。その理由のひとつは、南足柄市和田河原の荒井家に風外の達磨図が遺されていることです。荒井家は同地の福田寺を建立した家で、福田寺は最乗寺の末寺で、地理的にも近い。もうひとつの理由は、風外が修業した雙林寺（現・群馬県渋川市）の住職が最乗寺の輪番住職であることです。残念ながら風外が雙林寺で修業していた時期が不明で

あるため、風外の縁者を特定するまでには至っていません。

さて、風外が成願寺に來訪したのは何年頃なのでしょう。高瀬慎吾氏や竹内尚次氏は、風外の示寂年（じじやく）から逆算し、風外五十歳頃の元和年間（一六一四年から）に來訪し、成願寺に住した期間を四年前後、そして六十歳頃の寛永五年（一六二八）頃に次の地へ旅立つたと推定しています。

成願寺での風外の活動も多くはわかっていません。故松本赴氏は成願寺の住職から聞いた話として、風外という名は住職としての記録はないものの、寺の口伝として伝えられていること、また風外が造った池があったと記録しています。また成願寺には風外の作品、瀟湘八景図と達磨図が残されています。瀟湘八景図は八十歳の作品であるため、風外が真鶴に居た時のものであり、成願寺に留まっていた当時、画に親しんでいたのか不明です。

『聯燈録』によると成願寺での生活は、風外の望んだものではなかったようで、「不如意」のため曾我山の洞窟へ入ったと伝えています。

この曾我山の洞窟は、「風外窟」と呼ばれ小田原市田島と同市上曾我の二か所にあります。『名家略伝』によると、風外は寒暖によって住む洞窟を使い分けていたといえます。田島の洞窟は山

の中腹の谷にあり、夏でも涼しい場所です。一方上曾我の洞窟は山の麓の人里近くであり、南に面しているため日が良く当たる場所です。夏は田島、冬は上曾我と移動していたのかもしれませんが。風外はこの洞窟で、禅画を描いていたことが確認できます。田島に伝えられた伝承には、洞窟の入り口に竹竿に刺した画が掛かっていると五升の米と替えて持つて帰ったそうです。田島には現在でも風外が描いた「寒山拾得図」や「釣鐘型名号」、「布袋図」が残され、この伝承を裏付けています。

また田島の風外窟は古墳時代の横穴墓が複数口を開けているところがあります。『聯燈録』にある修行僧文道の逸話では、文道を隣の洞窟に泊ませたとあることから、この逸話が田島の洞窟での出来事であることがわかります。



田島風外窟

一方、上曾我の風外窟内には、2つの碑が残されています。ひとつは、「当山開基 風外道人御影」とあり二見父子が寄進した碑、もうひとつは「風外道人御影 脇立共佛八尊」を二見父子が寄進し、洞窟周辺の山を寄進したとして、代田、稻毛、細田、熊沢、交野（片野カ）の姓が彫られています。二見姓は曾我別所、その他苗字は上曾我に多い姓です。この碑の建立年は寛永五年（一六二八）であり、風外がこの地を去ったため彼を偲んで碑が建てられたと考えられています。

曾我山の洞窟から移動した先は、『聯燈録』によると、直ちに真鶴山へ向かったとありますが、『名家略伝』によると箱根山中とされています。

地域誌『相中襍記』には、風外が小田原市風祭の宝泉寺にいたとする口伝が綴られています。宝泉寺は江戸時代初期に無住であった時期があり、風外が庵として使用した可能性があります。また同書には、東京都向島の弘福寺にある「咳の爺婆像」は、風外が自らの両親の姿を刻み、それを時の小田原藩主、稲葉正則の家臣が移動したと記しています。『名家略伝』は『相中襍記』の成立より後に書かれているため、『相中襍記』を参考にしたと考えられます。風祭を去った風外が向かった先は、『聯燈録』によると真鶴山「東嶺の肩」

の巖窟とされる。松本赴氏は石丁場になつていた「上人穴」であつた可能性を示しています。

こうして「穴風外」の異名をもつ風外は、二十年近くを過ごす真鶴の地でもその名に違わず、新たな居穴生活を始めたのです。

【参考文献】

- ・安中市学習の森ふるさと学習館、『風外禅師生誕450年記念 風外慧薫——安中で生れた曹洞宗禅画の祖——』、安中市学習の森ふるさと学習館、二〇一八年。
- ・小田原市郷土文化館、『特別展 生誕450年記念 風外慧薫——洞窟暮らしの禅画僧——』、小田原市郷土文化館、二〇一八年。
- ・竹内尚次、「風外道人の足跡を辿つて」、『墨美』101号、墨美社、一九六〇年。
- ・「風外道人の足跡を辿つて」、『墨美』104号、墨美社、一九六一年。
- ・平塚市文化財保護委員会、『平塚市文化財研究叢書一 風外慧薫禅師とその作品』、平塚市教育委員会、一九六〇年。
- ・松本雲舟、『奇僧風外道人』、私家版、一九三五年。
- ・山崎美成著、千賀春城訂、『名家略伝』、英文蔵、一八四二年。
- ・嶺南秀恕 他、『日本洞上聯燈録』、鴻盟社、一八八五年。

風外慧薫の書画 真鶴に伝わる作品から

新井 人志（教育委員会教育課）

昨年、生誕450年を迎え、孤高の禅僧とも呼ばれる風外慧薫は、書画にも秀でた人物としても知られています。その作品は高い評価を受け、近年、その評価は国際的にも高まりつつあります。風外の書画は、なぜそんなにも高い評価を受けているのか、その作品の魅力を本稿では探ってみたいと思います。

日本の中世では、禅宗において、禅林絵画は、仏教絵画に道教的な主題を与える道釈人物画がその母胎になったとされています。

寒山拾得、布袋図等の脱俗の象徴である僧の姿や、過去の禅宗の高僧の頂相（高僧の肖像を描いたもの）、あるいはその教えを絵にしたものを、悟りを得た証しとして師匠が弟子たちに渡していました。これが禅林絵画の発端となったのです。その後、禅宗では、官製の五山派に代わって林下と呼ばれる禅の計脈が台頭してきました。その林下の計脈は、禅宗に厳しい戒律と修行をもたらし、戦国時代になると、五山派の地盤を崩し、地方大名の庇護、

支援のもと、庶民に広がっていきました。それに伴い、禅林絵画も、五山における文芸的要素と禅の要素の欠如に反発して、より強い在野性と主観性、それにわかりやすい主題提示という傾向に進んでいき、その作品もまた、禅の教えを世間に広げる手段として、広く庶民の手に渡っていくようになったのです。

公家文化と五山派の影響がまだ強かった上方より、関東においてその傾向は顕著であり、江戸初期において、中世禅林絵画の伝統を引き継ぎ、その主題のひとつでもあった達磨像や布袋図、寒山拾得図などを、素朴かつ野趣あふれる表現でみせたのが、群馬の安中で生まれ、小田原山中にある洞窟や、真鶴の東嶺中に穴居した風外その人でした。

風外がどの時期に、またどのようにして書画の技術を会得したのかは不明です。おそらくは、様々な禅宗の寺で修行を重ねる中で会得していったものと考えられます。



布袋図 真鶴町教育委員会蔵

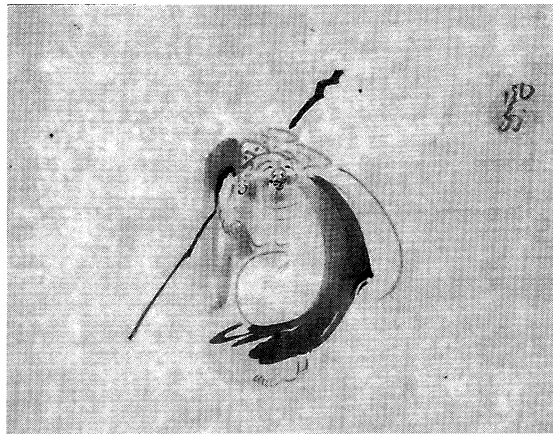
真鶴町内には、教育委員会が所蔵している「布袋図」（真鶴町重要文化財）をはじめ、個人蔵のものも含め、多くの風外の書画が伝わっています。風外が真鶴に居住していた頃、多くの住民に、布教と功德を与えることの両面から、書画を描いては与えを繰り返していたためと考えられます。

この風外の「布袋図」をみると、どことなくその筆遣いに、薄い墨色による柔らかな描線と、またユーモラスな感じのある表情がみとれます。この柔らかな素朴な表現は、この時代の禅林絵画の特徴を物語っているといえるでしょう。またこの「布袋図」の画面左には、「世間誰可論 大福有余身 何笑老宿客 途中只一人 讚共風外書之」という、移動を重ねる自分自身を、この布袋に重ねるかのような内容の画賛が、風外自身によって揮毫されていますが、この書体も独特のものです。

また前掲の川口真鶴町文化財審議会委員が触れているように、真鶴町内の岩地区にある瀧門寺には十二幅の風外の書（真鶴町重要文化財）が残されています。それにしたためられていることばは「無門関」等の禅書・公案集や、「菜根譚」等の中国古典書から引用されています。

このように、風外の書に見られることばの選択には、難解な禅の教義を説くよりも、庶民の心に自然と入ってい

くような解りやすいものが書かれています。このあたりは、仏教書や經典からの難解な教義を書にした、これまでの禅宗の名僧の墨蹟とは大きく異なる点です。



布袋図 個人蔵

風外のあと、同じ江戸時代に生きた白隠や仙厓といった禅僧がいます。白隠は江戸時代中期、臨済宗中興の祖と言われ、仙厓も江戸時代後期の臨済宗の僧です。この二人は、共に風外より後の年代の僧ですが、林下の禅林絵画の持つ個性主義を頂点にまで高めたことで、現在でもその作品が国内外で高く評価されています。

白隠は、豪快な筆遣いと、濃い墨色により太く力強い描線で描かれた迫力ある画面構成による、豪快かつ写実的

な達磨図を描き、後の曾我蕭白や池大雅にも大きな影響を与えたとされています。一方、仙厓は禅における様々な教えをモチーフとして、対象を簡略化した表現により、早い筆さばきで飄々と描き出しているのが特徴です。

風外の芸術は、この2人の僧による禅林絵画の最高潮への時代に向けて、その橋渡しをした重要な意味合いを持つものと言えるでしょう。

文化財トピックス

先日、岩地区の造成地から、江戸時代初期の頃のものと思われる刻印石と矢穴石が出土しました。

真鶴では、江戸城築城のため、徳川幕府の命を受けた各地の大名が、小松石を切りだして、江戸に運んでいました。その大名達が、自分達の受け持つ丁場から切り出された石を、識別する手段として、石工に、その石工たちの符丁、もしくは彼らを使っている各大名の家紋を刻ませたものが刻印石と呼ばれるものです。

これらの石が発見された造成地は、最も近い丁場からも離れた場所であることから、かつての石の加工場であると思われる。

今回発見されたものには四角を丸で

囲んだ刻印がされています。この紋は、黒田家のものとされていますが、確かなことは不明です。

また、この刻印石の端には、十cm四方の矢穴が刻まれており、この大きさから江戸時代初期のものと推定されます。

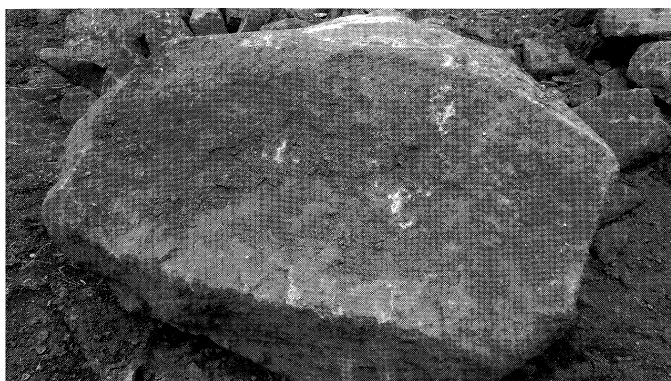
また同じ場所から、同じ大きさの矢穴が刻まれた石も発見されました。この矢穴石も同時期のものと推定されます。

真鶴半島の海岸には、横一列に十幾つもの矢穴が刻まれている石が現在も数多く残されていますが、いずれも穴の大きさは五〜七cmほどで、明治から昭和初期にかけての近代に入ってからのものがほとんどで、江戸時代の頃の矢穴石はほとんど発見されません。

刻印石は、現在、真鶴町内では、しとどの巖に置かれているものと、町民センターの中庭に移したのものと、個人宅の敷地内に置かれているものが町内で確認されています。

この度、発見された刻印石は、町内で確認されているものの中では最も大きいものとなります。

新しく発見されたこの刻印石と矢穴石については、現在、岩ふれあい館のグラウンドに移してあり、今後は、表面の土の除去等のクリーニングを行うとともに、発見された場所、刻印の特定等、時間をかけて調査をしていきたいと思います。



矢穴石



刻印石

文化財審議委員会 研修視察報告

第一回

- ・視察日 平成30年7月12日(木)
- ・視察地 群馬県安中市
- ・安中市学習の森ふるさと学習館
- ・見学

「生誕450年記念 風外慧薫
—安中で生まれた曹洞宗禅画の祖—」

第二回

- ・視察日 平成30年11月22日(木)
- ・視察地 神奈川県小田原市
- ・小田原市郷土文化館分館松永記念館
- ・見学

「生誕450年記念 風外慧薫
—洞窟暮らしの禅画僧—」

平成三〇年は、真鶴に所縁の深い禅僧、風外慧薫の生誕四五〇年となる年でした。それを記念して全国各地で風外の回顧展が催されましたが、とりわけ大規模なものとなったのが、風外の生誕地である群馬県安中市で開催されたものと、風外が移り住んだ小田原市で開催された両展覽会です。

今回、文化財審議委員会では、研修視察として、この両展覽会の視察見学を実施いたしました。

安中市の学習の森ふるさと学習館で開催された展覽会は、曹洞宗禅文化の会が協力・後援となり、禅文化の会の会員（各曹洞宗寺院）所蔵の作品を中心に、諸々の文献、併せて五十八点の資料が展示されました。

本展の見学では、展覽会を担当された同館の佐野亨介学芸員の解説・案内のもと、各曹洞宗の寺院から出品された風外の書画四十二点と、風外の業績が記録された江戸時代の書物『日本洞上聯燈録』を拝見いたしました。

また小田原市の郷土文化館分館松永記念館で開催された展覽会では、当町の瀧門寺にある風外の書十二幅と貴船神社の書四点の真鶴にある風外の書画をはじめ、平塚市博物館の風外コレクション等、併せて四十二点の作品資料が展示されました。

展覽会を担当された保坂匠学芸員の解説のもと、同展を見学。達磨図、布袋図、寒山拾得図等の題材別に分けられている作品、また小田原や真鶴、金指等の風外ゆかりの地の写真パネルも見ることが出来ました。

同展を見学後、風外が住んでいたとされる小田原市郊外にある田島、上曾我の両洞窟を保坂学芸員の案内のもと見学いたしました。

両展の見学を通して、風外慧薫の真鶴での活動ならびに業績について、各資料を生で見ることによってあらためて確認できた研修視察となりました。



田島風外窟見学



安中市風外展見学

平成三〇年度文化財保護事業

◎文化財保護事業

国指定重要無形民俗文化財

・貴船神社の船まつり

町重要伝統文化行事

・岩兒子まつり

・岩地区夏まつり（灯籠流し）



土屋家美術展示

◎文化財広報啓発事業

町民センター展示事業

貨幣展

幼稚園・学校の歴史展

真鶴の祭り写真展

古地図・絵地図展

風外慧薫展

源頼朝展

民俗資料館展示事業

端午の節句展

貴船まつり展

土屋家美術展

お正月展

桃の節句展

文化財だより第三十一号発行

4/26/3	6/4/7/1	7/2/9/2	9/3/10/28	11/6/12/24	H31/1/4/3/31	4/14/5/27	6/9/8/26	9/8/11/25	12/8/H31/1/27	2/9/3/31
--------	---------	---------	-----------	------------	--------------	-----------	----------	-----------	---------------	----------